意志をうけついで歩く

故 田中さんの霊前にこの誓い

その日――密葬が行われた故人の生前の〝わが家〟から、準組合葬にとって最高の場所として当てられた四山指導部のまわりに至るまで、約五百メートルほどの道をすき間なく埋めて寄せられた、おびただしい数の花輪に目を見はらぬ者はいなかったが、これこそまぎれもなく故人生前のいさおしのほどを示すものだった。

指導部の二階に設けられていた祭壇からは、故人の面影が全参会者に向かってにこやかにほほえみかけ、ローソクの火のゆらぐ霊前には三池労組、三池主婦会の両代表をはじめ、とくに故人が死の直前までそこを拠点として活動してきた大阪府総評などの代表から心をこめた弔辞が献げられた。そのきた活動の重みを伝え、今は言葉なき故人の呼びかけが、全参会者の胸から胸をつらぬいて鳴りひびき、改めて働く者の連帯の尊さと命を守る闘いの重大さを教えていた。

かけがえのない夫の、余りにも突然の死によって、はからずも未亡人になってしまった妻のマサ子さん（43才）は、悲しみに声をつまらせながらも、流れ落ちる涙をうちふるいながら故人の霊前に固く誓った――「主人は、人間の正しい道をただまっすぐに歩きつづけてまいりました。ですから遺族となりました私たちもまた、亡くなりました主人の遺志をうけつぎながら、主人が歩いてまいりました同じ道を歩きつづける覚悟でいます」。

言葉は短かかったが、それは全参会者の心を一つに固く結びつけふるい立たせた。なぜならその誓いこそ、その日集まった全参会者の胸に固まっていた決意でもあったのだから。

連帯の誓い

故人のいさおしをたたえて、あらゆる労働組合や機関、個人からとうてい数え切れないほどの花輪が献げられ、また五十数通にものぼる弔電が寄せられた。

とくに弔電は、故人が死の直前まで活動していた大阪の地から集中したが、そのすべてが故人の不慮の死を悼むと共に、その固い遺志をついで前進することを誓っているが、その中から幾つかを次に紹介する。

――ご急逝を心からお悼み申しあげます。貴方が燃やし続けた抵抗の炎は、私たちの心の奥深く永久に受けつがれ、行くてをともし続けることでしょう。心からご冥福をお祈り致します。（**合化東圧労組**）

――突然のご逝去にぼう然自失のほかありません。輝ける三池の伝統に生き、活動されてきた田中さん、私たちは貴方の死を超えて前進することをお誓いします。ご家族・労組の皆さん、どうかお気落としなく。田中さん、安らかにおやすみください。（**日本社会党大阪府本部**）

――ご逝去を悼み、謹んで哀悼の意を表します。大阪で無理をされたのではないか、もう少しお世話できなかったかと悔やまれてなりません。最後までお仕事のことをいい続けられた田中さんの死を無駄にせず、CO闘争の完全勝利まで、三池の皆さんとともにがんばることをお誓いし、ご冥福をおいのり致します。（**大阪統評**）

広げよう〝三池の火〟

連帯に包まれた葬儀

命を守る闘いを広げるために、大阪府一円の職場をたずねながらCOオルグ中だったのに、思いも寄らぬ〝激性肝炎（電激性肝炎ともいう）〟という職場をたずねながらCOオルグ中だった不慮の死を遂げた田中工さん（46才、四山指導部所属）の準組合葬は、去る十九日、故人生前の住居で営まれた密葬のあとを受け、四山指導部で盛大に開催され、仲間の三池労組員とその家族はいうに及ばず、田中さんの訃報におどろきかけつけた各労働組合代表、社会党その他の諸機関代表などが、延々と続く列をつくって永の別れを惜しんだ。【仲間の肩にかつがれて】

こんな体に誰がした

俺達にも前収補償を

じん肺患者、総会で決意

CO闘争・三池の命を守る闘いのかげに、さびしくとり残されているかのような存在の〝三池じん肺会〟（会員百九人。会長は向井芳夫さん。全国じん肺患者同盟の一支部）は、この三十一日三川指導部で定期総会を開き、新しい年度の活動方針を決定、あわせて役員改選を行った。

じん肺総会

総会には三十数人の患者がかけつけたが、どの患者の表情も、毎日毎日せめさいなんでくる死の恐怖と生活不安にしいたげられていることを思わせて暗かった。

集まった患者たちは、はからずもつきおとされた自分たちの悲惨な生きざまを小声で語っては「せめて、なんとか人間なみのくらしができるような補償を勝ちとる道はないものか。もっと三池労組がじん肺問題を積極的にとりあげてくれないもんだろうか」と、真剣にその道をさぐり合った。事実またこの日、患者の一人はさもなじるようにいったものである――

「こんな悲惨なじん肺患者がいるのを見もせずに何がCO闘争か、何が命を守る闘いか、といいたかですよ」。

今、じん肺患者の間には死亡者がうちつづいている。今年ばかりでも五人の患者が、まさに窒息状態の中で悶死していった。昭和三十九年に三池じん肺会が結成されて以後の死亡者といえば、三十七人。中には、三十七才の若さで死んでいった人もいる。

職員組合と新労関係の患者が組織している〝桂友会〟を加えれば死亡者は相当の数にのぼるだろう。

じん肺患者は、長期療養給付開始後三年たてば、自動的に会社から解雇される。

いよいよ重傷となって配転をすすめられる患者も、前収が補償されていないために、命とひきかえに坑内の仕事にしがみつくことを余儀なくされている。

それどころか患者の中には〝要入院者〟となりながらも入院できない人さえいる。死ぬ直前まで人

死は突然にきた

大阪での活動中に不慮の死を遂げた故田中工さんの任務は、生協組の拡大を兼ねてのCOオルグだった。

故田中さんは、十月一日大牟田を元気に出発、自動車をかって大阪へ。向うでは大阪府総評を拠点に、同総評の連帯にささえられながら組合から組合へと走り回り、死の日までに回ったところはなんと八十組合にものぼっている。組合への誠実さがその活動となったものの、そのことを知ってはたれもが舌をまいている。

故田中さんは十四日発病。はじめカゼを思わせていた病状が急に悪化、絶対不治の激性肝炎とわかり、そのまま大阪市でもっとも大きい総合病院のK病院に入院。加療の効なく十七日の午前二時五十一分、ついに息をひきとった。

発病から逝去まで余りにも急だったため、組合長に伴われ、飛行機でかけつけた家族の方々も間に合わなかったが、さいわい故田中さんはその死に至るまで、仲間の宮崎オルグをはじめ大阪府総評の暖い連帯に包まれながらの闘病だった。その点、お礼のいいようもない。

今は冷たくなった故人の遺体は自動車で十七日正午大阪を出発、十八日の午前四時過ぎ、ご家族や金執行委員に迎えられて自宅に帰った。つつしんで、哀悼の意を表しておく。

なお、悲しみの遺族は今後〝大牟田市四山町三鉱社宅五十一棟〟に居住されるが、それは次の人々である。

母　田中　チヨさん　67才
未亡人　マサ子さん　43才
長女　扶美さん　高校一年
長男　康裕君　中学二年

命を守る闘いの火を広げるにもこの遺族を忘れてはならない。

四山指導部五分会新聞〝きずな〟から

水俣から新室日の仲間を迎えて、家族ぐるみの交流。田中さんのうれしそうな顔がある。